

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/3)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ①佛立信者の憲法

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学ばせていただきます。乗泉寺が日本一の大寺院へと飛躍していった当時の、「ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼「ご奉公は報恩の第一歩であり、功德の源泉です。されば御宝前のお喜びをいただく「ご奉公に改良させていただくことが、何より肝心、大事大切です……標題のテーマの講話の第一声です。ご奉公精神の核心といたしても良いでしょう。即ち「ご奉公」とは御法にお仕えし、お祖師さまの御為に、そして一切衆生の幸福のためにと我が身を使って奉仕することですから、この大原則を忘れて偉ぶったり、「やらされてる」「仕方なし」等と随喜が欠ければご奉公になりません。自分の都合が優先し、自分の納得いくようにしか動けないのも、そもそも公に奉る奉公ではないのです。御法さまが喜ばれるよう工夫し、身を勞し、心を尽くして務めてこそ、お教化も参詣も、巡回も事務や清掃も、すべてが功德となるのです。

▼「ご奉公は、させていただく喜びが基になってこそ功德となります。お役が上がるほど、信心も向上しなければなりません。お役に信心が負けては、却って罪障を積む結果となって、現世から墮獄している人が多いのは勿体ないことです。「ご奉公はさせていただくほど、重なるほど功德が積めます。それには「させてください」と願って、喜んで務めることが大事です……法華経は喜びの心「随喜心」をご信心の原点と教えます。ですから、すべてのご奉公は「有難い」という随喜で務めます。ところが、忙しくなったり、責任が大きくなると、この最も肝心な随喜を忘れる人があります。そこを「お役に信心が負ける」と誠められたのです。ご信心が進むと、数人のお世話から数十人のお世話へとご奉公が拡がり、任される責任の範囲も重くなります。それは菩薩行の成長の証でもあります。ご信心の成長が追い付かないと、逆に愚痴や慢心の種になり、お役を務めて罪障を積むこともあるのです。

▼それにはまず「滅罪抄」の「ご精神を心の底から頂戴してかかるのが一番結構です。日叡上人は「滅罪抄は当講の憲法である」と仰せられ、これを以て乗泉寺「弘通」ご奉公の根本とされたのです……東京の乗泉寺中興の第八世講有日叡上人は、参る人のない破れ寺を百か寺余の門末を擁する大寺院へと育てられました。そんなご奉公の土台となったのが大勢の優秀なお弟子と役中信徒の育成でした。日養上人は、歓尊がそんなご弘通の人づくりの軸に開導聖人の「常講嘆読滅罪抄」の御指南を教えられ、ご奉公の精神とされたと仰せです。滅罪抄は、「ご信心をしながら墮獄する三箇条として「宗義の習い損じ」「師を捨てる罪障」「異体同心を破る行為」を誠めますが、日叡上人は特に二番目、三番目のお教務やご信者同士の関りを日常のご奉公の中で厳格に指導され、慢心を除いて敬いを育てられました。

※参考「常講嘆読滅罪抄」……講内の大改良の目標とされた高祖六百回遠忌を終え、明治十六年に更なる引き締めのために御講席ごとに拝読させた御指南書です。ちなみに二条目は「吾祖曰、法華経にはあらねども、この経に名をよせたる人を色にも嫉み、戯れにも軽しめぬれば、法を謗ると同じく無数劫無間地獄に墮つること疑いなしと。されば法は人によりて弘まる。人法一箇これなり。然るに師匠と頼み、法義を学びし御導師を、ある時は褒め敬い、ある時はそしり軽しめ、或時は捨て、ある時は拾い、ある時は頭こうごにいただき、ある時は尻に敷き、口には褒むるといへども心にて殺しなんどせば、仏不軽品に説かせ給いしが如く、地獄免れがたしと蓮隆両祖堅く誠め給えり」と法義を具体的に仰せです。

「御教歌」 妙法にあひぬる上は御奉公 これより外にたのしみはなし

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/4)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ②どんなお役もお看経で勤めよ

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼乗泉寺に山内計作さんという支部長さん、今日での局長さんがおられたときに、たいへん支部がよく治まり、皆が喜んでご奉公させていただき、乗泉寺がたいそうに栄えました。山内さんは漢字の大家で、小柳博士と共編で新漢和辞典を編纂された大学者でしたが、入信以来、ずっと素直なご信心前でした。初めて御導師から支部長の大役のご奉公を仰せつかったときのことです。日叡上人の許にお伺いなされて「私、このたび大役を仰せつかりまして、有難うございます。どのようにしてお勤めさせていただきましたらよろしいのか、御指南賜りたく存じます」と申し上げられました。日叡上人は「そうか。それでは教えてあげよう。どんなお役でも、信心第一で勤まるものだ」と答えられ、「一日十本のお看経」を御指南されたのです。山内さんはこの教えを金科玉条にして「一日十本」を欠かさず、お看経は支部長が支部内第一でした。この山内支部長さんは荒い言葉ひとつ出さず、支部内にただ一回のいさかきも起こらず、部内役員一同は喜んでご奉公させていただいたのです……「お役はお看経で勤めよ」と指導を受けた山内支部長の話は有名です。知恵のある人や器用な人、経験豊かな人は、ご奉公も世間の活動と同様に自身の自力に頼りがちです。だからこそ一流の知識人の山内さんが口唱に徹し、経力でご奉公を務められた話は大きな意味があります。「あの立派な支部長さんが素直正直に徹し、口唱に励んでいる」と刺激になったはずですよ。

▼ところが、この山内支部長の後に出られた支部長さんは、社会的には地位のある人ですが、お看経は多くありません。すると支部内に絶えずゴタゴタともめごとが起こって、たいへんに困りました。日叡上人は偉かった。ちゃんとこのことを知っておられた。だからお役はお看経で勤めさせていただけると教えられたのです……ご奉公のお役は、誰でも勤められる易しいところもある反面、難しさもあります。祖師の崇高な信仰を求める人も、生活が破綻して藁にもすがる心境の人も、御法への感謝の思いで出来るご奉公を喜んでする人も、叱られて渋々出てくる人も、思いの温度差がバラバラなのが信行の場ですから、御法の徳をいただく努力を怠れば皆の思いが噛み合わず、ゴタゴタが起ころのは必然です。世間と同様に、出来の悪い人を切り捨てることなどできません。故に御経力に縋るのです。

▼お看経のあがらぬ局長がお役を務めますと、寺内がゴタゴタする。局長になったら、会社の社長になったように思ってはなりません。信者の大将になったように思っては大間違いで、信者のお手本になったのであります。お手本が悪くなると信者全部が悪くなる。ここに、心を致さねばならないのです……ここでは山内支部長を例にあげて、まず局長が信徒の範となつて口唱せよとお話しますが、これは連合長や組長、班長でも同じことです。数人のご信者を御宝前からお預かりし、信行のお世話をさせていただく立場になれば、ご信心の良きお手本となつてこそご信者も育ち、それぞれにご利益を得て連合や組を発展させることができるのです。我が組が今より元気だった頃を知る人は、当時の役中と比べてみるのも良いでしょう。御宝前やお教務への敬い、ご信者へのお世話の仕方、ご奉公に臨む姿勢、家族の育て方等、良いお手本があればこそ皆が元気にお参りし、ご奉公を楽しむ組やお寺となつていたはずですよ。こうした良き信行のお手本の軸が、お看経に励むことなのです。

「御教歌」とてもわれ人をみちびくものでなしと 思はば励こゑもをします

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/5)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ③信者は兵糧方

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼大尊師開導聖人のことは「信者は兵糧方」だと仰せられました。これは千古の金言と思っております。いやしくも御導師が兵糧に困るようなことをしていたら、絶対にお寺の発展はありません。第一に「こころすべき」と思いますが……開導聖人が明治二十一年に、総講元

の中川卯兵衛さんほか役中各位に示された心得に、「当講も如説抄の軍(いくさ)に譬え給うに順じて申さば、御法門する人々は軍方(いくさかた)也。講元、取締は賄方、兵糧方也」とあります。戦いは前線の兵士のみですではありません。兵器を作って運んだり、偵察して情報を集めたり、怪我人を救護したりと様々な役割の人で一軍は構成されます。特に食糧等の生活に必要な物資を前線に届ける兵糧方は重要で、精鋭部隊もこの補給が絶えれば全滅の危機です。そんな意味で、「教務と役中は役割が違えど、共に折伏の軍を戦うチーム」と仰せなのです。即ち、ご信者が頼まれて仕方なしと役務を務め、お客さん気分でご奉公するようでは、強い弘通体は出来ません。故に弘通の尖兵の教務員がご奉公に専念できるよう、役中は万全の後方支援をせよと指導されたのです。ちなみに御指南は続いて、

「御講席は即是道場なれば弘通所也。戦いの場也。されば兵糧方も尤も陣中へ出役すべきもの也。これによりて是を思うに、講元、役中も、尤も御講参詣は欠席なくして、不奉公の者あらばきつと制すべき重役也」と御講を例に、当然、役中も御講を主宰する構成員で、欠席などもつてのほか。予め懈怠者を折伏し、御講の勤まる準備をせよと仰せです。実際に役中が育たず、お寺や組の運営を教務さんが丸抱えにするところは、ご弘通が伸びません。故に石岡上人は「千古の金言」、永遠に模範とすべき言葉と肝に銘ぜよと仰せなのです。

▼大尊師のころ、大津に「米卯」御牧卯兵衛という小さな米屋がありました。大尊師もその頃は、あまりお手許もご裕福というわけにはまいらなかった。この米卯の主人は、そっと米びつを開けてみて、知らぬ顔をして米一斗をコッソリ入れておく。なくなった時分に、またコッソリと入れる。別に紙に書いて張り出してもらおう気持ちもなければ、人に自慢する気持ちもない。ただ、大尊師の兵糧に気を配った。これが米卯の信心です……大津佛立講は小野山勘兵衛さんの入信から始まりますが、この勘兵衛さんの親戚で、「米卯」の屋号で米屋を営んでいたのが御牧卯兵衛さんです。卯兵衛さんは大津弘通の当初から中核の信徒としてご奉公され、蛤御門の変で京都市中が戦場となり、開導聖人が避難してこられると、敷地の一部に法華堂を建てて開導聖人をお迎えされます。これが大津佛立寺となるのです。米びつをそっと覗いて常に食に不自由しないよう気配りされたのは、卯兵衛さんの有名なエピソードです。たくさんの子ども達をお弟子に採って養育されていた開導聖人が、ご弘通や弟子教育に専念できるよう、自分にできるお手伝いとして共にご奉公をされたのです。

▼この米卯は、やがて大津で有名な米問屋となり、そのご子孫から第二世日聞上人、第四世日教上人、講尊第十一世日颯上人、現講第十二世日宥上人、誕生寺日海上人も出ておられる。この気持ちが大切であります。(編註。のちに日海上人は大僧正に。また第二十一世講有は御牧日勤上人が晋位されました)……ご弘通を支えるために自身の役割を探し、喜んでご奉公。子供たちにご奉公させたのも同じ思いからです。卯兵衛さんに習え、と仰せです。

「御教歌」うれしきはみのりの為にあけくれて けふもわが世の日数也けり



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/6)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ④「ご奉公は頼んでさせてもらえ

が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼日叡上人は「ご奉公は頼んでさせてもらえ」「信心で押し通し、お看経は誰にも負けるな」と言われました……多くの人は、言われてからご奉公に当たります。「勝手にしたら叱られる」という謙虚な方もいますが、「用事が増える」と手を出さない人も少なくありません。皆、忙しい日常の中でのご奉公ですから、「役務だからする」「頼まれたのです」「のは仕方なくとも、必要も要望もないのに買って出すともよいと普通は考えます。しかし、本来ご奉公は、御法さまにお仕えして我が身の罪障を消滅いただくのですから、「言われたからする」では思いに欠きます。忙しいことや苦手なことも、そこは「信心で押し通し」、即ちしっかりとお看経に励んで、「私にさせてください」と手を上げよ、と教えられたのです。

▼大津の法華堂の大灯籠に毎晩お明かりをおあげしていた林甚太郎さんは、家は貧乏で体も弱い。それが毎晩、欠かさずお点灯させていただいているので、次第に功德が貯まってだんだんに家の内が良くなってまいりました。それで他の人が欲を起こして、私も代わってあげさせてくれと申しましたら、「あなたは貧乏でもなく、体もお達者。それでどんな他のご奉公でも、させていただく気ひとつで、させていただけましょうが、私はこのご奉公でいっぱいです」と言って、このご奉公を買って出て一生続けたとか。大尊師の御指南抄に載っておりません……京都以外で最も早くご弘通が開けた大津では、幕末の政争で開導聖人が四年間、ここに避難された際に大きく伸びます。滞在を喜ぶ御牧卯兵衛さんは屋敷の一角に法華堂を新築し、隣地に法宅(今大路屋敷と命名)も完成。そこに開導聖人デザインによる石灯笼が建立されて街道を照らし、法華堂の存在を知らしめます。この大灯籠に毎日一合の油を供え、献灯のご奉公を買って出られたのが林甚太郎さんです。その志が記されています。

▼(編註。林甚太郎さんの記事)「大津、御牧の裏に住む林甚太郎夫婦は至りて信者なり。家、極めて貧し。身弱し。子供五人あり。小野山要人の語りて曰く、久しく中絶の佛立寺の大灯籠の常灯、この甚太郎は毎夜灯せり。余の信者曰く、汝ばかりせずとも、月替わりに我にも灯させよと云う。甚太郎曰く、汝は貧にもなし。身も強し。我は身も弱し云々とて独り灯せりと云々。この人、大いに達者に相成り候。また今日を送るに不思議に安樂に暮らせりと云々。今迄は食えずにありし日も折々は有りし由、今はなしと云々。されば身を大事と思ひ給わん人は、ご奉公を大事にし給うべし。信行の功德、御守りと申すものは、凡夫の欲深き了見とは裏上なること、かくの如きものなり」(『名字得分抄』14/133)……貧しく、体調も優れない林さんは、他のご信者のようにご奉公が出来なかつたのでしよう。自分に出来ることを探すうち、長く点灯されなかつた大灯籠のお給仕を思いつく。そして、それを一生懸命に勤めることで現証を得るのです。他の方が羨んで「私もしたい」と言われても、他のことは難しいのでこれだけは自分にさせて欲してと続けられる。そんな信心を習えと仰せです。

▼日叡上人は「信者に景氣、不景氣はない」とよく言われましたが、ほんとうの信者には、景氣、不景氣は問題ではないと思います……御法の御力添えを得て様々な苦難を克服するのが現証の御利益です。佛立信者は、これを手にするために信行を習い、実際にご奉公に努めて罪障消滅に励んでいます。故に世間の好不況の風には左右されないと仰せなのです。

「御教歌」信心は無解こそよけれ法華経の 妙を頂く位なりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/7)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ⑤「ご奉公の功德をゼロにしない

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼乗泉寺の支部長で、今は顧問の田村さんの話ですが、この人に「あなたは将来、大地主になりますよ」と申したことがあります。言った通り大地主になって、東京はもとより郊外にも広い大きな土地があり、今度の空襲も早く疎開して一物もやられず、大きなご利益を得られました。この人が先日、「お講師、あなたの予言通り私は大地主になったので、いっぺん見に来てください」と言われましたが、多忙でまだ見ていません。素晴らしい邸宅もお持ちです。なぜこのような予言をしたか、これには訳があります……ご利益は因果応報で、必ず種となる原因があります。立派な果報を得たご信者の、種まきのご奉公に倣えと仰せです。

▼乗泉寺の五百坪の隣地を買うについて、先方が足元を見て、どうしても売らぬと言う。これが買えぬとせっかく設計した本堂が建たぬ。どうしても建てねばならぬ絶体絶命のところです。これを交渉して買えることになりました。また熱海の妙立寺の土地を四百五十坪どうしても買いたい。これも坪五十銭値切るのに根気よく交渉を続けたものです……土地の果報を得た因として、お寺の境内地拡張にたびたび骨を折られ、苦労して功德を積まれたことをあげられます。お寺は弘通の法城ですから、田村さんのお陰なら、その功労は甚大です。

▼とうとう妙立寺のご隠居さん(日叡上人のご内室)のほうが地主に同情し、「もうずいぶん安いんだから、そのくらいで話をつけたら」と申されたとき、「もう坪五十銭まかせたら全体で二百二十五円安くなります」と言う。そこでご隠居は、「まかせたら車代にあなたにあげよう」と言われました。田村さんも「それではいただきます」と言ってしまった。今でこそ田村さんは道中するのに五万や十万の金は小遣銭で持っていますが、当時は東京熱海間の汽車賃にも欠ける有様でした。えらいもので、相手は田村さんの熱に負けて、手を打ってしまいました。当時の時価の半値です。「隠居さんもうずいぶん喜ばれたものです……ところで、そこに一つの落とし穴が。調子に乗ると、凡夫の根性が活発になることがあるのです。

▼田村さんがご隠居のところにもえたとき、「ご隠居さんが言われるのに「田村さん、あのときあなたにあげると言うた二百円は、御宝前に御有志しておきましたよ」と、たったこれだけです。さすがの田村さんもムツとした。これは「ご本人が、「ご隠居の懐旧談として御忌の御講でご披露されたのですから、間違いありません……頑張れたもとは信心か、欲の心か。この違いで「ご奉公が功德になるか否かを分けます。ご奉公は打算的になっては台無しです。

▼皆さん、「ご隠居さんのお心が分かりますか。田村さんは今、喉から手が出るくらいお金に困っている。だからこのお金は渡してはならない。「ご奉公してかすり取るようなことでは、ご奉公の大きな功德はそれでゼロです。紙一枚かすっても、「ご奉公の功德と紙一枚とを替えたことになる。こんな勿体ないことはない。さすがに大尊師仕込みの「ご隠居さんです。そこを教えてくださいましたのです。分かりますか。「ご隠居の「ご年忌のとき、田村さんは「あのとき、二百円の金をもらっていたら、今日の田村は絶対にありません」と泣いて語られていました。が、まったくその通りです……せっかく尊いご奉公をさせていた大きながら、損得をからめて「純粋な信心からの行為」を欲で濁らせ、功德を積み損ねたり罪障を積むようでは、結果的に長年の「ご奉公が自分の果報を変えません。欲の煩惱が喜ぶときは要注意なのです。

「御教歌」 ほねをしみすこい事してむくはぬと 思ふは因果しらぬものなり



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/8)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ⑥「ご奉公と欲

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、「ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼「ご同前は役中さんばかりですが、「ご奉公と欲を取り替えしなさんなよ。お寺の物をかすって役得したと思ったり、御導師の取り分をかすめて信者のためだと思ったりするのは墮獄の因です。多くの支部で支部長の末路が悪いと聞いていますが、一つは不敬罪で、今ひとつはこれ(金銭)です……一般の信徒の間は比較的純粹にご信心ができます。財のご奉公でも、

それがどう使われるかよりも、純粹にご弘通を願い、そして我が身の罪障消滅を願ってさせていただけなのですが、その浄財を運用する立場になると、公私が混同して損得勘定が働く人があります。そこを戒められています。たとえば、皆さんに配布するものやご供養の食材が余ったなら、「もとは私の御有志だから、もらっておこう。皆さんのために働いたので、これも役得」とばかりに、当然の如く懐に入れる神経になると罪障が生まれます。「お寺のものは祖師のもの」で、役中はお祖師さまのものをお預かりしてご奉公させていただく意識をしっかりと持たねばなりません。個人で引き取る場合は相応の冥加料を納めるのも、そんな公私のケジメを守るためです。また本来、御導師にご供養して功德を積むべき財を、「ご奉公の費用が足りないからこつちに回そう。その方がご信者の負担も減って助かる」等と平気で考えるのも、浄財運用に馴れたベテランが犯しがちな罪障です。お役も上の立場になるほど多くの浄財の運用が伴います。欲心で功德行の筋を曲げない心得が大事です。

▼近い例では、「お寺の御宝前へお供えするのも、我が家の御宝前へお供えするのも、お供えには変わりがない」と言って、我が家の御宝前には御供物が上がりませんが、お寺の御宝前には知らぬ顔。これはやはり、腹の中は欲ですね。お寺の御供物はおさがりが口には入らぬが、我が家のなら我が口に入る、「ここですな……凡夫はいろいろ理由をつけ、自分を正当化します。ジワジワと欲心が軸のご奉公に馴れると、歪んだ自己の信心前に気付かず、真面目にしているつもりでいます。その歪みの気づきのポイントに、御供物の上げ方をご教示です。

▼「どんな財も、我が家に置いておったのでは功德にならぬ」と日叡上人は教えられました。「お寺にあげては家が困るから」では逆さま。家が困るからお寺へ、御宝前にもらってもらうのですよ。困るからこそ功德の種まきです。時かぬ種は生えぬのは、この道理であります……開導聖人は「損得の算盤は逆さに持て」教えられました。凡夫の損得計算よりも、功德をつませていただく筋をきちんと押さえて実践し、また他人も導くのが役中なのです。

▼お寺によっては、御塔婆料や御供料で経営しています。元来、御塔婆料や御供料は御導師のお手元へ差し上げるべきもの。「ご信者が御宝前におあげするのは、罪障消滅のために仏法僧の三宝に供養するのです。でなければ何にもならぬ……亡き靈に功德を送るための、三宝への供養が塔婆料です。御宝前への御供も、自分の口に入れる打算性があつてはなりません。故に、おさがりは御導師に納めます。そんな功德を積む筋を忘れて自分たちが使うために供え、御有志が足りないので「事務局運営の財源」と当てにしている罪滅も叶いません。

▼信者の浄財が御宝前の浄財にならねば功德になりません。頭に「信者の……」が付いているのは紐付きです。けれども、お寺によってはそれでは困るでしょう。そんなときには御導師のお慈悲で交付金として受けるのです……合理的な運営も、ご信心の筋の上にあるのです。「御教歌」すこい事して徳したとおもふなよ 損する種をまきはじめてたり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/9)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ⑦浄財の捉え方

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼札幌の信廣寺では、私の判のないお金は一切使わない。それは不浄財に等しい。功德にはならぬからです。ここには事務局の人たちも多いでしょうから申しておきますが、事務局のお金は、御導師からのお慈悲の交付金です。とかくお金は功德になるよりも、役中さんには毒になることが多く、それで仏さまはお金を毒蛇と仰せられています……浄財の考え方を厳しく指導されたのは石岡上人の特長ですが、それは日叡上人のご信心でもあります。即ち、形は同じお金でも、ご信者の御法を護る浄志が御宝前に供えられ、功德化された浄財をご奉公に使わせていただくのがご信心で、世法の金銭と同じ感覚では意味がないのです。

▼日叡上人のご生涯にただ一回、大きな怨嫉がありました。それは乗泉寺がたいへん繁盛して経済も大きくなった頃でも、日叡上人はお金を信者の自由にはさせられなかった。上人は「お寺のお金は御宝前のもので、住職が監督し、講務は勘定をして、一銭一厘間違いのないようご奉公させていただくべきである」と、こういう信念であられたからです……「お金のことは経済に長けた在家に任せばよい」「出家の教務さんはお金に関わるべきでない」と普通は考えます。僧俗の立場の違いを思えば当然とするのも然り。しかし、日叡上人の素晴らしさは、そんな常識を踏まえた上で、「されど御法さまの浄財をお預かりし、ご弘通に用いるのに、住職が無関心では済まされまい」とご信心の筋を厳しく通されたことです。これは、「尊い御法さまのもの」を責任もってお預かりするお給仕の心と、ご信者の浄志をご弘通に活かして「ご奉公をさせていただく」ご信心を、範を以て示されたものと拝します。

▼ところが支部役がお寺を改革すると言って、教務を月給制にして、あとは役中で管理すると言います。日叡上人は「ワシは信者の指図は受けぬ」と断られた。御宝前のものであるお金を、会社のお金か何かのように思って、教務を月給で雇って、あとを自由にしようというようなことは、信心ではなくなり謗法であるとして、支部の申し出をお許しになりませんでした……お金を効率よく使うには、一元的な管理が便利です。そんな発想で御宝前に御供えされたものも御導師への外護も、喜捨された弘通費や自分たちの護持会費も、すべてを一つの財布に納めて「教務の手当てやお寺の維持費、日常の活動費等をやり繰りします」では世俗の会社や新興教団等のやり方と同じで、浄財がただのお金にしかありません。

▼そのため、支部長以下十三名、当時の支部役は十五名でしたが、そのうち二名を残してほとんど大半、三百戸以上の「ご信者と教務二名が袖を連ねて退転しました。そんな大きな怨嫉が起こりましたが、日叡上人は「ご信心の筋を曲げませんでした。かくしてお寺の会計の建て前をお守りされたのです。この信者の多くは帰り、頭株は破産しました……大寺院に成長する果報を得るには、浄財を正しく功德化できる力も具えねばなりません。ゆえに大半の信徒の退転のリスクを恐れず、ただのお金と浄財の区別が出来きよう筋を通されたのです。

▼お寺の会計は、あくまでも御導師のお指図をいただいて「ご奉公させていただき処理すべきもので、信者が御導師を指図すべきものではない。「ワシは信者の指図は受けぬ」と押し通されたのです……お金の運用と思えば「自分が仕切る」「経理に明るい人に任せよ」となりません。日叡上人は浄財のいただき方もご信心の功德行と捉えられた、そこを学べと仰せです。

「御教歌」 月がけの五銭六銭だしたとて お供養とつてさしひきをせん



役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/10)

「役中の「ご奉公精神」 日叡上人門末の一人として ⑧我を出さぬよう「ご奉公

石岡日養上人の昭和二十九年の講話から、「役中の「ご奉公精神」を学んでいます。乗泉寺が日本一の大寺院へと大きく飛躍していった当時の、ご信者方のご信心を吸収しましょう。

▼御礼金や御回向料、お塔婆料は住職の手元へお届けすべきもの。その中で御礼金は御導師から支部への交付金として、支部の会計にいただかれるよう、しかし御回向料やお塔婆料はあくまで信心の建前から僧に供養すべきものとしてお手許に留めおかれて、ご弘通のためにご使用になりました。「御導師を良くすれば支部は発展する」「支部が教務を養ってやるように思ったら、ご弘通は止まり、「ご利益はいただけなくなる」とよく申されました。どこまでも御導師が監督をし、役中は勘定役、これが日叡上人の固い信念であったのです……弘通の法城を護り、経済面の安定にも責任を持つのが幹部役中の務めですが、ご信者の随喜奉納の信心を育てるよりも、「功德を積もうと僧に供養したお金が既に受付にあるので、手っ取り早くそれを回そう」等と浄財の性格も考えず、お金をお金としてしか見ない扱いでは却って罪障を積みまます。浄財にはそれぞれ意味があり、心がこもります。その思いを功德に変えるのがご信心ですから、あくまでご信心の筋を通すために日叡上人は監督されたのです。

▼札幌のお寺でも、これに似たようなことがありました。それで、以後は私が乗泉寺の如く、私が指図をすると申しましたら、「それでは御会式を勤めません」と言っ。「よろしい。嫌な人は勤めなくてもよろしい。勤めたい人で勤めます」と言っ、この人たちは、かえって新教化に折伏されて改良しましたが、御法は強いお力です……日叡上人のご奉公をお手本に、石岡上人は札幌で浄財の筋を幹部さんに教えますが、早速反発されたようです。「誰のお陰で御会式ができるか分かってるのか。俺たちの金で御有志してるんだ。指図をするな」と言った具合でしょう。しかし、石岡上人は奉修費が減ってもご信心の筋を通された。結果、御会式は立派に勤まり、新入信徒の信心が育ち、古法華に折伏するまでになります。これを石岡上人は「ご信心の筋を通したゆえの「ご利益」とされ、御法の御力の素晴らしさと仰せです。

▼いろいろと話しましたが、要するところは、「ご奉公は結構だが一つ誤ると御法は怖いです。その怖いことの二か条とは「僧を軽しめることは怖い」「御法のお金を下手に使うことは怖い」、「この二つをくれぐれも心の中に入れてください……少し慣れると謙虚さを忘れて慢心し、上の役に就けば初心を失って慎みを欠きがちなのが凡夫の愚かしさです。これがご奉公のお役に出ると、せっかくの功德を積むチャンスをお台無しにします。そんなことにならない誠めとして、「ご信心の筋を学ぶお教務さんを軽んじない」「お寺のお金はただのお金ではなく、いろんな思いがこもる浄財という意識をしっかり持つ」を教えられたのです。

▼支部長や局長をすると家の末路が良くいかぬと言っ。では聞きましょう。私のお寺の局長さんは坂本さんと申しますが、信心改良して局長の「ご奉公をされてからだんだんと良くなっ、北海道の一流と申しますか、二とさながらぬような鉄鋼商となりました。担任住職とよく心を合わせて、我を出さぬように「ご奉公されれば、きつと結構になります。どうか開講当初の御牧卯兵衛さんのご信心に立ち返って、事務局の「ご奉公をさせていただきます……幹部役中は偉いだけではダメ。「仕事が出来る」「知識がある」「経験が長い」だけでもダメ。世間の役職と違い、御導師や教務さんの女房役としてご弘通を支えて大功德を得るのです。

「御教歌」 奉公人忠義一方つとむれば 開運出世其中にあり